

鹿児島大学法文学部紀要
「人文学科論集」第83号(2016)別刷
2016年2月発行

見田『入門』「高原」・(修正) ロジスティックス曲線再考

—「安定」か「滅亡」の二択を「免れることはできない」のか—

桜 井 芳 生

見田『入門』「高原」・(修正) ロジスティックス曲線再考 —「安定」か「滅亡」の二択を「免れることはできない」のか—

桜井芳生

1 目的

見田宗介『社会学入門』(2006b) (以下『入門』と略記) とくに「六 人間と社会の未来」のとくに要といえる(修正)ロジスティックス曲線(図1.)を再考する。

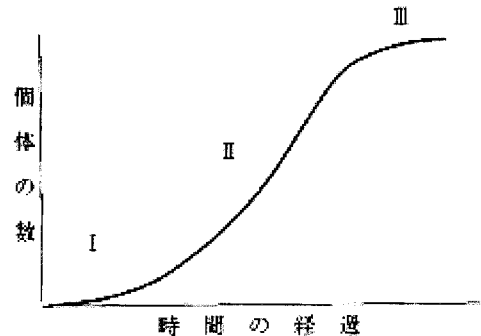


図1a ロジスティックス曲線

2 方法

(修正)ロジスティック曲線の数理的検討を目論んでいた。しかし、その前提である出典探索において、ある種の「発見」がなされた。本稿は、そのような文献学的方法による探索結果の、報告となった。

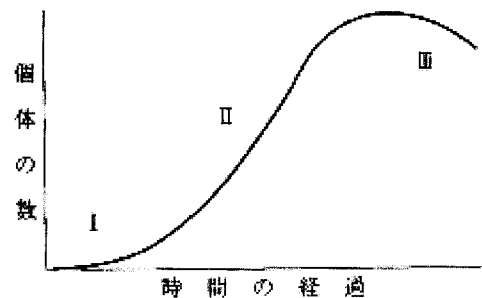


図1b 「修正ロジスティックス曲線」

3 考察

見田(2006a)において、「見田 それはまさにその通りだと思います。実は生物学の方では、ご紹介したS字型のロジスティックス曲線とは別に、修正ロジスティックス曲線というものがあります。実際の生物の中には、恐竜のようにピークを過ぎても安定平衡期にいかず、下降してそのまま減んでしまう種もいるわけで、この曲線はそういった場合の個体数の変化を示したものです。実は日本の人口曲線は、修正ロジスティックス曲線にそっくりなんですね。修正ロジスティックス曲線が成り立つ場合は、その生物が繁殖が安定平衡に向かわなければならないときに、いままでの高度成長を追求し続けると。その結果、不可逆的に破壊してはいけない資源や環境まで破壊してしまい、破滅に至る道を選ぶということです。」とのべられる。

図1. (2006b: 145)

(見田2009a)でも、「現代社会はどこに向かうか(朝日ジャーナル 創刊50年 怒りの復活)」(見田2009b)でも、「現代社会はどこに向かうか」の題名で『臨床精神病理』(見田2011)でも、『現代社会はどこに向かうか: 生きるリアリティの崩壊と再生』(2012)でも、真木(2013)でも、同様

な議論をしている。

ここでは、とくに、その最新版といえる「高原の見晴らしを切り開くこと」(2014) (以下「高原」と略記) と、上記『入門』の当該章「六」に多く注目しよう。(以下「入門 六」と略記)。なお後論のために、確認しておく、われわれが照準する『入門』の「六 人間と社会の未来」の章は「書き下ろし。」(2006b: 212) とのことである。

「高原」(2014) において、見田はこう述べる

「…(略)…環境要件によく適合した動物種(略)を新しく入れて放つと、初めは少しずつ増殖し、ある時期急速な、時に「爆発的」な増殖期を迎え、この森の環境容量の限界に接近すると、再び増殖を減速し、やがて停止して、安定平衡期に入る。生物学者がロジスティックス曲線とよぶS時型の曲線(図2の実線)である。」(2014: 29)

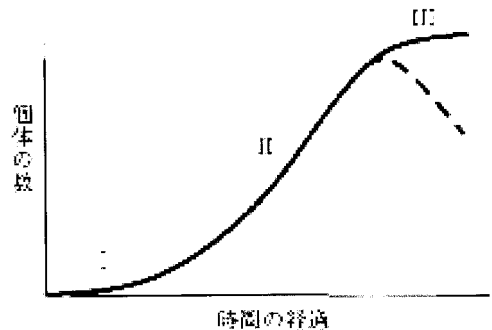


図2 ロジスティックス曲線

図2.

「(承前) これは成功した生物種であり、ある種の生物種は図2点線のように、繁栄の頂点の後、滅亡にいたる。これを「修正ロジスティックス曲線」という。」(2014: 29) (下線は桜井による。以下同様)

「(承前) 再生不可能な環境条件を過剰に消費してしまったおろかな生物種である。…(略)…。地球という有限な環境下の人間という生物種もまた、このロジスティックス曲線を免れることはできない。」(2014: 29)

以下、「入門 六」においても、「高原」においても、上記したその間に発表された類似論文・講演においても、この「安定」か「滅亡」かの、二者択一的な「免れ」なさ、を前提に論は進んでいく。

【「修正ロジスティックス曲線」探訪】

この見田の「入門 六 人間と社会の未来」「高原」の議論を検討してみたい。のだが、まずは、その要であるこの「(修正) ロジスティックス曲線」を吟味することからはじめなければならないだろう。とおもうのだが、一つ奇異なことがある。この「修正ロジスティックス曲線」の出典が、ほぼ初出といえる『入門』(2006b) から、「高原」(2014) にわたる上記の五指に余る文献すべてにおいて、全く示されていないのである！「入門 六」においては、見田のオリジナルであることが

文脈上明白である図をのぞいて、すべてのグラフに詳細な出典が小さい文字で明記されている。それにたいして、この「ロジスティックス曲線」「修正ロジスティックス曲線」のグラフは議論の要ちゅうの要であるのに、まったく、出典にあたるものが記されていないのである。「修正ロジスティックス曲線」と呼ぶ研究者もある。」(2006b:145)と、そっけない。筆者(桜井)が、以下自分で(謝辞のとおり、ご協力もいただいた。深謝。しかし、誤りの責は、桜井にのみ存する)、探索してみた。

【ロジスティック「ス」曲線】

まず(修正なしの)「ロジスティックス曲線」であるが、わたしが調べた範囲では、こう呼ばれる概念は存在しない。「ロジスティック曲線」(logistic curve)の誤記であろう。「ス」をつけないのが、通例である(logisticsでなく、logistic。sがない)。これだけいうと、揚げ足とりのように聞こえるかもしれないが、無視できない。

なぜなら、少なくとも二つの理由があげられる。第一に、以下わたしは、「(修正)ロジスティック曲線」(「ス」なし)が、ただしい表記であるとして、その出典探索を行うが、もし「ロジスティックス曲線」が、『入門』の出版2006年より以前に存在することが確認されれば、見田の出典がその系統である蓋然性がたかまるからである。わたしが以下述べる「(修正)ロジスティック曲線」の出典の推定があやまりである蓋然性が高まる。

第二、上記のように、見田は同主旨の文章講演を多く発表している。わたしのみるかぎりここでは、すべて、「ロジスティックス曲線」の用法である⁽¹⁾。もしわたしが上記した推測が正しいとすると、見田は『入門 六』の執筆時(それは『入門』の「あとがき」が「2006年1月」(原文漢数字)とされることから、2006年1月以前と推断される)に、いちど出典を確認(誤記だったが)したあと、その後はずっと、「自己引用」によっていたことを推測させる(「出典」も、「ス」なし、であったはずだから)。もちろん、「ス」ありとの先入見のまま、出典を複数回みた可能性もあるが。

【修正ロジスティック曲線の出典】

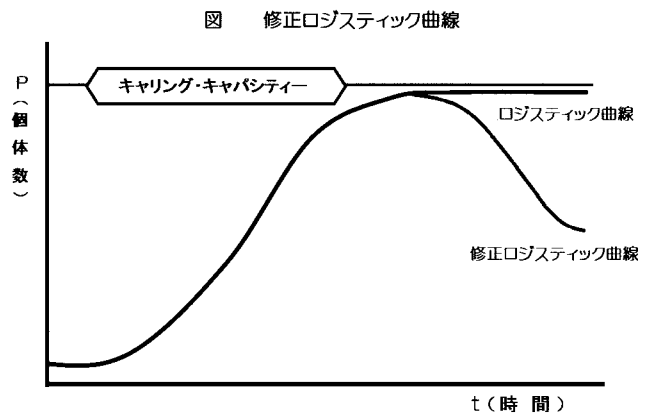
以下、「修正ロジスティック曲線」で、探索をおこなう。「修正ロジスティック「ス」曲線」で、googleを検索しても、見田自身の講演に関するもの、と、『入門』について言及する文章しかでてこない。「ス」なしの「修正ロジスティック曲線」で、検索をおこなうと、和文文献としては、論文が一本と、古田隆彦のブログがヒットする。論文の方は、粗鉄生産量にかんするもので、そこでの「修正」の含意は、見田のいうような通常のロジスティック曲線のように上昇するが、やがて下降する、というものではない。つぎに、英語で、検索すると、modified logistic ……という表記の

論文が数本みつかる。が、これも同様である。

古田隆彦のブログが候補として、残る。これがじつは、注目に値する。いうまでもなく、インターネット上の「検索」では、単行本までもその全文が検索範囲となるわけではない。わたしの以上の「検索」に「ぬけ」がある可能性は十分存在する。古田は、「JINGEN〈人減〉ブログ」という彼のブログで、「2015年2月9日月曜日」の日付でこうのべる。

「修正ロジスティック曲線」を提唱する！」というみだしで、「いくつかの動物の個体数は、増加から上限まではロジスティック曲線をたどりますが、その後、定常的な直線を持続するのはごく短期間で、むしろ下降していくケースが多いようです。…」

「…前半はロジスティック曲線、後半は下降していく曲線に、新たな名前が必要ということです。…」[そこで、筆者は新たな名称として、1996年刊の『人口波動で未来を読む』（日本経済新聞社）で「変形ロジスティック曲線」を、その後、1998年刊の『凝縮社会をどう生きるか』（NHKブックス）では「修正ロジスティック曲線」を提唱してきました。つまり、「修正ロジスティック曲線」こそ、ロジスティック曲線に代わる、一般的な人口法則と考えたのです。]とのべ、右のような図（図3.）を掲げる。http://jingenblog.blogspot.jp/2015/02/blog-post_9.html



見田の「ロジスティックス曲線」「修正ロジスティックス曲線」とそっくりである！ 上記のように、古田によると、コンセプト自体は、1996年刊の『人口波動で未来を読む』か、それ以前に発想され、1996年刊の『人口波動で未来を読む』において、「変形ロジスティック曲線」の名で発表され、1998年刊『凝縮社会をどう生きるか』で「修正ロジスティック曲線」と名付けなおされたことになる。（現物によって、上記と同主旨の事柄を確認できた）。

状況証拠の積重ねにすぎないが、以上の諸々の事実を総合すると、見田は、彼の（修正）「ロジスティックス曲線」を記述した（2006b）さいに、古田（1998）自体、かつ・あるいは2005年以前（『入門』のあとがきが、「2006年1月」だから）の、古田（1996）系統の（諸）文献を典拠とし、そのさい、ロジスティック曲線の表記を、ロジスティック「ス」曲線と、誤写した。そして、「高原」（2014）

論文にいたる、同主旨の数々の論文・講演でふたたび典拠にあたることはせずに自己引用に終始した。という蓋然性が最も高い、とわたしは推定する。

4 結果

【それは「安定」か「滅亡」の二択を「免れることはできない」を含意するのか】

原典と目される古田の議論をおってみよう。そもそも、なぜ、修正ロジスティック曲線では、減少のフェーズにはいるのだろうか。

「…(略)…、実際のそれは、生物の出生数と死亡数の変化という、二変数によっている。このため、前者では発生しないタイムラグが、後者では発生する。」(1996:243)とのべ、古田(2008)ならびに、それを引いた上記ブログでは、右のグラフ(図4.)が、描かれている。

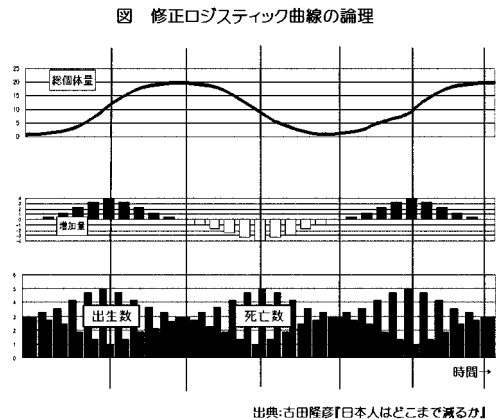


図4.

このように、古田自身の修正ロジスティック曲線のロジックは、下降トレンドにはいっても、それは「滅亡」を意味するわけではないのである。さらに古田は、「人間」にかんしては、「…(略)…文化や文明を創造する能力を持っているから、長期的にみれば、人口の推移は一つの人口波動から別の人口波動へと、次々に階を重ねる「多段階人口波動曲線」として描くことができる。」(1996:7-8)として、モデルとして、多段階の波動の連なりのグラフを描く(図5.)。さらにこのモデルを日本列島に適用して、日本列島における人口波動の推移を次のように、図示する(古田1996:11)(図6.)。

図表P-2 人口波動モデルの図化

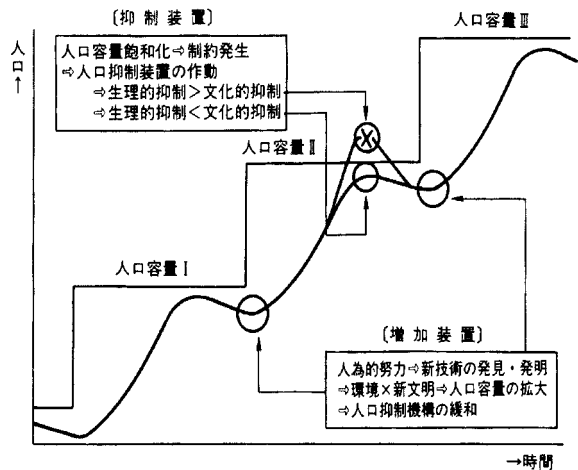


図5.

もはやわたしたちは、当初の見田「(修正)ロジスティックス曲線」の源泉をさぐるという本小

論の目標にたいして十分歩んできたと思料される。ここで、略記紹介した古田の「多段階人口波動曲線」の議論は、それ自体、紙数を費やして検討せざるをえないモデルであると思料する。

当初の問題意識に鑑みて、結論として、本稿の議論を小括しよう。

一、見田「社会学入門 六 人間と社会の未来」(2006b) から「高原の見晴らしを切り開くこと」(2014) にいたるまで、同主旨の文章・講演が何度も発表されている。この議論について見田がどれほど重視しているかがうかがえる。またそれに対応して、少なくない影響をもっているとうかがえる。

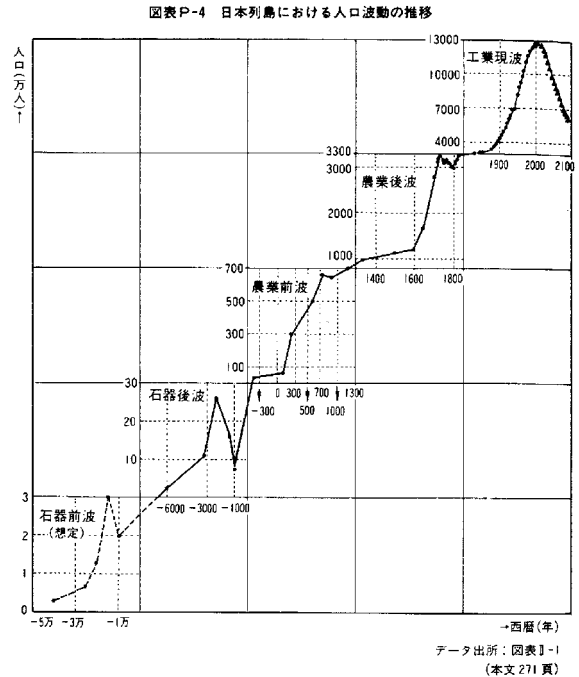


図 6.

一、そこにおいては、人間を含む生物は、「安定」(2014:29) (ロジスティックス曲線に対応) か「滅亡」(2014:29) (修正ロジスティックス曲線に対応) かを「免れることはできない。」(2014:29) ことが主張される。

一、掲げられる多くのグラフにおいて、詳細な出典が示されるのに、この「(修正/) ロジスティックス曲線」については出典が示されない。

一、「ロジスティックス曲線」なる表記は誤用であると推測される。「ロジスティック曲線」(「ス」なし) の誤記であろう。

一、見田の「修正ロジスティック (ス) 曲線」と内包が一致する用法としては、古田隆彦の「修正 (/変形) ロジスティック曲線」(「ス」なし) なる概念しか見いだせなかった。

一、よってあくまで蓋然的な推量にすぎないが、見田は、彼の (修正) 「ロジスティックス曲線」を記述した (2006a,b) さいに、古田 (1998) 自体、かつ・あるいは2005年以前の、古田 (1996) 系統の (諸) 文献を典拠とし、そのさい、ロジスティック曲線の表記を、ロジスティック「ス」曲線と、誤写した。そして、「高原」(2014) 論文にいたる、同主旨の数々の論文・講演でふたたび典拠にあたることはせずに自己引用に終始したと、わたしは思料した。

一、古田の「修正ロジスティック曲線」の概念は、見田の言明とは、若干しかし決定的な点で、異なっていた。すなわち、古田のそれは、減少フェーズにはいっても「滅亡」にいたることを必ずしも意味しておらず、モデルとしては循環するものだった。そして、すくなくとも日本列島の人間史にかんしては、これらの波動が多段階で接続するモデルを提起していた。

一、したがって、以上がただしいかぎり、「安定」(2014:29)か「滅亡」(2014:29)かを「免れることはできない」(2014:29)とはいえない【結論】。

(繰り返しますが、筆者(桜井)の探索不足の可能性は依然としてのこります。読者諸賢のご教示を切に望みます。)
(大浦宏邦氏(帝京大学)中井豊氏(芝浦工業大学)から、メールにて多大なご教示を賜った。ここに記して深謝します。)

注

(1) 一つだけ例外を発見した。(見田 2009a)である。たとえば(:188)の下段では、はっきり「ロジスティック曲線」と記されている(「ス」なし)。冒頭の注記によると、この文献は、2007年11月16日に行われた「講義」をまとめたものであるという。文字起こし担当者が気をきかせたかもしれない。

文献

- 古田, 隆彦. 1996. *人口波動で未来を読む: 100年後日本の人口が半分になる*: 日本経済新聞社.
— 1998. *凝縮社会をどう生きるか*: 日本放送出版協会.
真木, 悠介. 2013. "思想の言葉 ダニエルの問いの円環." *思想* (1070): 2-6.
見田, 宗介. 2006a. "[基調講演] 未来構想の社会学" 2006年10月21日 <http://www.rikkyo.ac.jp/feature/sympo/2006/1021.html>
— 2006b. *社会学入門: 人間と社会の未来*: 岩波書店.
— 2009a. "人間と社会の未来." *現代と親鸞* (17): 180-214.
— 2009b. "現代社会はどこに向かうか(朝日ジャーナル 創刊50年 怒りの復活)." *週刊朝日* 114 (19): 6-11.
— 2011. "現代社会はどこに向かうか." *臨床精神病理* 32 (3): 195-205.
— 2012. *現代社会はどこに向かうか: 生きるリアリティの崩壊と再生*: 弦書房.
— 2014. "高原の見晴らしを切開くこと." 2014. *特集社会学の行方*: 青土社.

